

2024年3月17日「十字架につけろ」という叫び

ルカの福音書 23章 8～25節

イエス・キリストの受難を覚える日々です。今週と来週はルカの福音書 23章から、受難の出来事を学んでいきましょう。

1. はでな衣を着せられたイエス (8～12節)

①ヘロデの興味 (8～9)「ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたく思っていたし、イエスの行う何かの奇蹟を見たいと考えていたからである。それで、いろいろと質問したが、イエスは彼に何もお答えにならなかった。」

ここに出てくるヘロデはヘロデ・アンテパスと呼ばれるユダヤの王。ヘロデ大王は彼の父親です。彼はイエスと会いたく思っていました。といっても、奇蹟を見てみたいといったものでした。そこで、イエスを前にして、興味本位な質問したのです。しかし、イエスはお答えになりませんでした。ヘロデの心を読み取っておられたからです。

②祭司長たち (10)「祭司長たちと律法学者たちは立って、イエスを激しく訴えていた。」

一方、祭司長たち、律法学者たちは立ち、イエスが律法に反しているとかを理由に、裁きを求めていました。

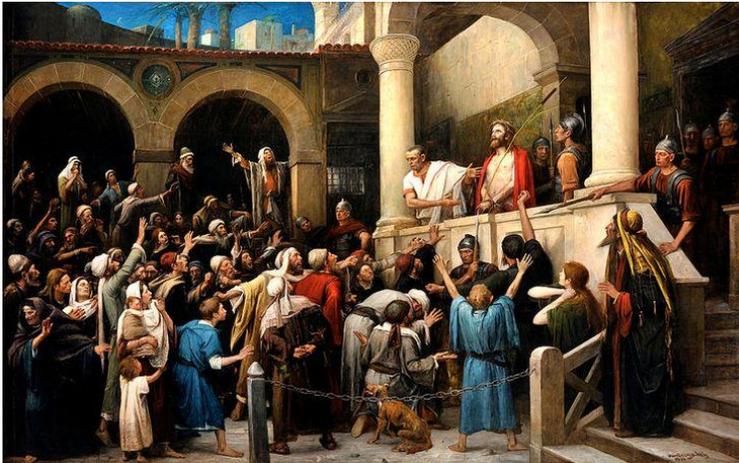
③侮辱、嘲弄 (11～12)「ヘロデは、自分の兵士たちといっしょにイエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はでな衣を着せて、ピラトに送り返した。この日、ヘロデとピラトは仲よくなった。それまでは互いに敵対していたのである。」

イエスに拒否されたヘロデ王は、仕打ちをします。兵士たちを使って、侮辱の言葉をかけ、あざけり、おまけに、はでな衣を着せて、ローマの地方総督ピラトに送り返したのです。この服は、ピラトとの対話で「あなたはユダヤの王か」と問われて、「その通りです」と答えたことに基づいています(23:3)。イエスの対応をめぐって、ヘロデ王はピラト総督と結託するようになりました。

2. ピラトと祭司長たち (13～19節)

①罪を見つけられず (13～14)「ピラトは祭司長たちと指導者たちと民衆とを呼び集め、こう言った。『あなたがたは、この人を、民衆惑わす者として、私のところに連れて来たけれど、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような罪は別に何もみつきりません。』」

ピラトはローマの地方総督です。担当地域の民を治めることに主眼がありました。ピラトから見ると、ユダヤ人である祭司長や指導者たちが、「民衆を惑わしている」と訴えている内容は、宗教的問題であり、イエス自身の行動や言動からは、ローマ法に基づくところの罪を見いだすことはできませんでした。



②釈放宣言 (15~16) 「『ヘロデとて同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。だから私は懲らしめたうえで、釈放します。』」

ピラトはヘロデも同じような考えで、私のところにイエスを送り返して来たということを書きました。そこで、結論として、ピラトとしては、イエスに一定の罰を与えて釈放するつもりだと伝えました。

③バラバ (18~19) 「しかし彼らは、声をそろえて叫んだ。『この人を除け。バラバを釈放しろ。』バラバとは、都に起こった暴動と人殺しのかどで牢に入っていた者である。」

ところが、祭司長たちは受け入れません。そして、声を上げて言ったのです。「イエスを除け! バラバを釈放せよ!」バラバはエルサレムでの政治的暴動と人殺しの罪状で投獄されていました。

3. ピラトの決断 (20~25 節)

①十字架要求 (20~21) 「ピラトは、イエスを釈放しようと思って、彼らに、もう一度呼びかけた。しかし、彼らは叫び続けて、『十字架だ。十字架につけろ』と言った。」

ピラトからすれば、同じユダヤ人同士のぶつかり合いのようにみえたので、イエスを釈放するつもりでした。そして、ユダヤ人たちに釈放を理解をさせようとしたのです。ところが、彼らの攻撃姿勢は高まるばかりです。そして、叫ぶのでした。「イエスを十字架につけよ! 十字架につけよ!」。

②叫び声が勝つ (22~23) 「しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。『あの人があんな悪いことをしたのか。あの人には、死に当たる罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたうえで、釈放します。』ところが、彼らはあくまで主張を続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った。」

ピラトはそれでもあきらめず、説得しようとしていました。三回目です。「あの人を十字架につけるような罪状がどこにあるのか。どうやっても見つけれない。私は懲らしめた上で、釈放します。」ところが、扇動された人々の圧力は強く、十字架につけよとの要求は広がっていきました。そしてついに、その声の方が勝ってしまったのです。

③十字架宣告 (24~25) 「ピラトは、彼らの要求どおりにすることを宣告した。すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入っていた男を願いどおりに釈放し、イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。」

ピラトは民衆の声に負け、民衆の要求を飲み、イエスを十字架刑にすることを宣告しました。逆に暴動と人殺しのかどで収監されていたバラバを釈放したのです。そして、イエスの刑などについては、ユダヤ人にまかせることにしたのです。

《結論》 今朝の聖書箇所にはピラトというローマ帝国の地方総督が出てきました。ピラトは、イエス・キリストについて調べた結果、「彼のうちには罪は見いだせない」と考え、それを三回にもわたって、ユダヤ人たちに主張しています。ご存じのように、このピラトは私たちが毎週唱えている使徒信条の中に出てきます。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」とあります。こんなことから、聖書の記述と使徒信条は矛盾するのではと思われる方もいらっしゃると思います。しかし、よく読むと、ピラトはユダヤ人たちの叫びに押されて、ついに、「彼らの要求通りにすることを宣告した」のです。ピラトが宣告しなければ、イエスが十字架につけられなかったのは確かです。このことについては、このあとにも少しお伝えします。

さて、イエス・キリストは逮捕されてから、祭司長の所、ピラトの所、ヘロデの所、そして再びピラトの所に連れてこられたのです。ここで、ピラトはユダヤ人の指導者や民衆を集めました。そこで彼は、イエスを取り調べても、彼らの言うような罪は見つからないので、彼を釈放すると伝えました。それに対し、祭司長や民衆と扇動された民は「この人を除け。バラバを釈放せよ」「十字架につけろ」と叫んだのです。ピラトが何を言っても彼らは聞かず、叫び続けたのです。その結果、イエスの十字架刑は決定されました。そうすると、イエス・キリストを十字架につけたのは、その宣言をしたピラトはもとより、そこにいて扇動した祭司長、扇動したユダヤ人、民衆ということになります。彼らの叫びにより、救い主は十字架につけられたのです。それでは、ヘロデ王はどうなのですか。また、直接には関わっていない律法学者たちはどうでしょう。彼らも同じでしょう。また、少し判断が難しいですが、イエスが逮捕された時に、「この人もイエスと一緒にいた」と言われて、「いいえ。知りません。」、肝心な時に三度もイエスを否定し、直後に号泣したペテロはどうなのでしょう。突き詰めると、他の弟子も含めて、その罪を免れる者はいないと言って言い過ぎではありません。こうした観点から言うと、ピラトは罪人の代表者なのです。「ポンテオ・ピラトのもとに」と使徒信条にはあるのは、そのような意味なのです。

それでは、私たちはどうですか。時代が違えば、国も異なるから、全くこの出来事には関係ないと言えますか。私たちが認めなければならないのは、私たちが罪人だということです。「義人はいない。ひとりもない。(ローマ 3:10)」「すべての人は罪を犯した」(3:23)とあります。実を言うと、私たち自身も「十字架につけよ」と叫んだ人々と同じです。そのように叫んだ張本人です。心を澄ませて考えてみてください。かつてのあなたの言葉、行動、思い、振る舞いなど、あのことこそがキリストに対する罪なのです。他人のことは良いのです。自らの胸に手をおいてみてください。自己中心、妬み、怒り・・・そもそもキリストから目をそらすことが罪です。それらが、「十字架につけよ」という叫びに重なっていくのです。このことに肯かれたあなたは、今こそ神の前に額づくべきです。その罪を告白するのです。そうすれば、十字架の主は臨み、救いの恵みにあずかせてくださるのです。キリストを信じている者も、十字架の主によってこそ、喜ばしく生きる道があるのです。みなそろって、十字架の主を見上げていきましょう。